



第1回「Campus新聞大賞」の表彰式(写真・産経新聞社提供)

## 産経EX第1回「Campus新聞大賞」を受賞 学生記者がブラインドサッカーを体当たりルポ

産経新聞の兄弟紙「SANKEI EXPRESS」(通称EX)編集部が半年に一度、優秀作を選んだ「Campus新聞大賞」の初の受賞作に、中央大学有志学生記者3

人が書いたブラインドサッカーをテーマにした記事が選出され、4月25日、東京都千代田区の産経新聞東京本社で表彰式が行われた。

第1回「Campus新聞大賞」に輝いたのは、「ブラインドサッカー日本代表選手に迫る」(3月8日掲載)の記事で、企画をたてて取材し、記事を書いたのは、有志学生記者の清水恵美さん(文学部4年)、坂井悠紀子さん(総合政策学部3年)、地紙裕

子さん(経済学部3年)の3人。記事は視覚障害のある人たちのスポーツのひとつ、ブラインドサッカーに焦点を当て、体当たりルポと二人の日本代表選手へのインタビューで構成。

アイマスクをつけて体験イベントに参加した学生記者が、「真つ暗な闇の中、唯一頼れる光は、仲間の声だった」の見出しで、ボールの音源を頼りにゴールを狙うブラインドサッカーをルポ。選手へのインタビューでは、高校生になつてから視力を失った選手が「人生には見えていた人生が見えなくなった人生の2つがある」と自らを振り返りながら、ブラインドサッカーと出合い、パラリン

ピックに出てメダルをとることを夢見ていることを紹介し、「視力を失って、夢や希望が見えてきた」との見出しで記事を飾った。

選考対象となつたのは、昨年10月の「Campus新聞」創刊から今年3月までの半年間に掲載された15大学の23のテーマで、その中から本学学生記者の記事が「視力を失ったことで夢や希望という光を得た選手たちの人生を描き、読者に感動を与えた」(鈴木裕一EX編集長)と評価され、栄えある第1回大賞に輝いた。

表彰式には、十数の大学から約40人の学生記者が出席。EX編集部から大賞受賞作が発表されると、清水さん、坂井さん、地紙さんの3人は目を丸くしてびっくり。信じられない表情でお互いに顔を見合わせながらも、すぐさまにこやかな表情に変わり、素直に喜びを表していた。

大賞のほか、優秀賞に法政大学の「恋愛ゲームの『魅力』と『魔力』」、特別賞に同志社大学の「外国人観光客の皆様 そうだ 京都、行こう」がそれぞれ選ばれた。

表彰式後は、会場を移して交流会が開かれ、各大学の学生記者が産経新聞の記者を交えて和やかに歓談、友好を深めた。

「Campus新聞」は大学生に新聞づくりを実体験してもらおう、と、EXが昨年10月にスタートさせた企画で、毎週火曜日にフルカラーのタブロイド紙、見開き2ページで掲載。大学生や大学院生が自由にテーマを決めて取材、写真を撮って記事を書いており、本学では大賞受賞作のほかに、これまでで在生が書いた

「取材拒否」の舞台裏を探る、「若い世代が育む都市型農業の未来」が掲載されている。

(編集室)

◇喜びの第1回「Campus新聞大賞」受賞者◇

感動させる側に立てた喜び

文学部4年

清水恵美さん

(宮城県立宮城第一女子高校出身)

感動の連続だった。しかし最後に大賞受賞という感動が待っているなんて予想していなかった。1年半前にブライインドサッカーを初めて見た時に感動し、いつか世間に発信したいと思っていた私にとって、この企画はチャンスだった。

実際の取材では、選手をはじめ様々な方から話を伺うことができた。そこからどれを記事にするかを考えるのが、一番辛かった。どんなにがんばっても全てを記事にはできない。そして、ようやくできた原稿を担当者に送ると返信が返ってきた。件名は「感動しました」。そのメールに私は感動した。

ようやく形になるのだと思うと心が震えた。そこが私たちにとってのゴールでもあった。

だから大賞受賞の瞬間は驚いた。そして喜びが全身に溢れてきた。自分たちが悩み抜いた上で紡いだ言葉が、伝わったことに感動した。私たちも今回の記事で、感動させる側に立てたということが何より嬉しい。共に記事を書いた2人、そして支えてくださった多くの方に感謝と喜びを伝えたい。

社会とのつながりを体験

総合政策学部3年

坂井悠紀子さん

(福岡県立東筑高校出身)

2年次からFLPジャーナリズムプログラムを履修し、何か自分のやってきたことを形にできるようなことをしたい、と思っていた

時、学生記者募集を知り、思い切って応募しました。

軽い気持ちで応募したものの記事にするまでは順調にはいきませんでした。企画段階から、誰をどのよう

思うような話ができず苦労しました。

しかし、自分の書いた記事が産経EXに載った際の充足感は何物にも代えがたいものでした。しかも大賞をいただくこともでき、真摯に仲間たちと取材を行ってきたよかったです、と感じました。このような社会とつ



喜びの大賞受賞者。左から地紙裕子さん、清水恵美さん、坂井悠紀子さん (写真・産経新聞社提供)

ながりを持つ機会を作ってくれた産経新聞社と大学の担当者、そして取材にに応じてくれたブライインドサッカー日本代表の二人の選手には感謝の気持ちでいっぱい입니다。今回の経験で培ったものを、大学生活で活かし、さらなる成長を目指したいと思います。

活字の素晴らしさを知る

経済学部3年

地紙裕子さん

(香川県立高松高校出身)

私は新聞を読むことが苦手でした。文章を書き、人に何かを伝えることも昔から苦手でした。しかし今回 Campus 新聞づくりに参加したことで、活字の素晴らしさに触れることが出来ました。

新聞を読むのを避けていた私でしたが、ブライインドサッカーの取材、記事づくりに携わって、活字に対して「食わず嫌い」であった



中原邦晶氏

ティア活動等について約1時間講演した。中原氏が医療支援で訪れたのは、大震災で甚大な被害を被った岩手県大船渡市。

ボランティア活動等について約1時間講演した。中原氏が医療支援で訪れたのは、大震災で甚大な被害を被った岩手県大船渡市。難所で医療支援活動をはじめた。

## 大震災被災地で災害医療活動に携わる 中原邦晶氏（北里大医学博士）が講演

「大病院による被災地域への医療支援の試み」をテーマにした講演会が4月28日、多摩キャンパス5号館で開かれた。講師は、北里大学医学部の医学博士で

脳神経外科専門医、救急専門医の中原邦晶氏で、東日本大震災の被災地域に行つて災害医療活動に携わつた体験談を交え、現地の状況と今後必要とされるボラン

総勢29名の医療支援チームの第1陣として3月18日から3泊4日の日程で、災害医療活動を行った。メンバーは医師、看護師、薬剤師、事務員らで構成。食料、水、着替えなど必要なものはすべて持参し、車に医療支援物資を積んで被災地入りした。災害対策本部がある大船渡市役所を活動の拠点にした中原氏らは、まず隣接の陸前高田市の避難所で医療支援活動をはじめた。

ことが分かりました。新聞の記事の一つ一つに記者の愛が詰まっていることに気が付きました。ただ文章を書くだけなら誰だって出来ます。大事なのは、その文章には届ける相手がいいて、その相手に、伝えたいこと

を分かるように伝えなければいけない、ということですね。今回、それを痛感しました。自分には出来ないと思つていたことをやりきつたとき、自分の可能性は広がりました。しかも、大賞をい

ただき、次もがんばりたいと自信をつけることが出来ました。自分には出来ない、向いてないものなど、誰にとつてもひとつもないと思えます。自分の可能性を信じていきたいです。

中原氏は「最初に活動計画を立てることが大事です。それと荷物の運搬が一番大変なので、個人の荷物は少ない方がいい」とアドバイスをしたうえで、「診療はカルテがないので、患者さんに一から話を聞いて行い、1時間半で40名を診察しました」と報告。医療班には途中から市職員も加わった。

は、「安全靴を履いていたので楽に行動できた」という。夜はお寺の救護所で、懐中電灯を使って診療。日程の後半からは電気が復旧し、夜間の医療活動が行えるようになった。夜は寝袋にくるまって寝た。

中原氏は「避難所で赤ちゃんや子供がなじめずに泣いているのがショックでした。ペットも鳴き声が迷惑なので避難所には連れて来れません。本当に気の毒でした」と避難所の様子を語った。

瓦礫が散乱する被災地で



ボランティアに関心がある多くの学生が出席した講演会

## 「世界の中のフランスと3・11後の日仏関係」 フィリップ・フォール駐日仏大使が講演

フィリップ・フォール駐日フランス大使による「世界の中のフランスと『3・11』後の日仏関係」と題した講演会が6月9日、中央大学多摩キャンパス8号館8304号室で開かれた。会場の大教室は、多くの学生や教職員、報道関係者で満席となり、原子力発電推進国でもあるフランスの駐日大使の話に真剣な表情で

立てて行動することが大事です」と重ねて強調。市災害対策本部には、医療班の行動記録を提出、「ノートに引き継ぎ事項を書いて、次の支援につなぐことが重要です」と指摘した。

29名の医療支援チームは、第1陣が被災地入りした3月18日から3月28日までの間に第4陣までに分かれて活動。生後1カ月の赤ちゃんと99歳まで、延べ923名の患者を診療した。「医療チームの半数にストレスによる心的障害があった」という中原氏は、現地医療基盤の自立と安定化などを課題に挙げた。また被災地でのボランティア活動の心構えとして、①自分のことは自分でする「自立」

聞き入っていた。フィリップ・フォール大使は、冒頭、東日本震災の3・11後も駐日大使館を閉鎖することなく、東京を離れずに、対日救援活動など危機管理にあたったことなどを紹介したうえで、①フランスの国際的地位 ②当面の外交課題 ③3・11以降の日仏関係の3つのテーマに分けて、講演した。

②被災地自治体、ボランティア団体との連絡、協力を密にする「協調・同調」 ③身の回りを自ら管理する「安全」 ④活動記録をつなぐ「継続」の4つのポイントを指摘した。

講演会は、活発な質疑応答も行われ、被災地ボランティアへの関心の高さをうかがわせた。(編集室)

まず、フランスの国際的地位については、27力国が加盟するEUの人口が5億人で、GDPは160億ドルと、北米地域の140億ドルを超えていることを指摘し、「EUは国家を超えた関係を構築しているところだ」と強調した。なかでも共通通貨ユーロの導入が、各国の経済に「大きな安定をもたらせた」と述べ、導

入以前に「後戻りはできない」と断言した。またフランスの労働力が世界トップ3に入る高い評価を得ており、生産性も世界で2番目に高いことを紹介。さらに人口6200万人と決して多くない人口のフランスが、外国から多くの投資を受けていることも強調した。

加えて大使は、フランスはそのイメーヂであるエルメスやシャネル、ルイ・ヴィトンだけでなく、「もっと幅広い分野で活躍している」として、対日貿易の輸出品としてエアバスや民間衛星、薬品、自動車、農産物などを挙げ

のフランスと3・11後の日仏関係  
ns le monde et les relations franco-japonaises apr



講演するフィリップ・フォール駐日フランス大使

ことから、原宥への取り組みは「100年後を見据えていかなければならない」との考えを示した。

続いて大使は、外交に話を移し、「外交面におけるフランスの強みには、世界2番目のネットワークがある」と述べ、世界各国に188の大使館、97の領事館、400の文化施設が存在することを挙げた。またフランス語がアフリカやメキシコで広く勉強されていることなどを紹介し、「フランス語は（世界で）より一層重要な役割を果たす」と強調した。

一方、フランス大統領の任期が5年で、シラク元大統領が12年間、ミッテラン元大統領が14年間その任にあったとして、「長くG8サミット（主要8カ国首脳会議）に参加し、世界に存在感を示した」ことを指摘。それに比べ、日本について「首相が頻繁に代わり、落ち着かない。国際会議があるときには特に残念」と述べて、近年5人も首相が入れ替わっていることに苦言を呈した。

「3・11後の日仏関係」については、「日仏関係は、3・11前から良好でした」と述べたうえで、フランスと日本は文化や建築の分野など「直感的に共感できるものがある」とし、食の分野に加え、最近では日本の漫画がフランスの若者に高い人気があることを挙げた。3・11後、フランスは即日、100名の消防士の救援部隊を日本に派遣したのを

はじめ、人道的支援だけでなく、ミネラルウォーター、医薬品、防護服、放射能の線量計の提供など、「何でもできることはする姿勢で臨んだ」と述べた。

3月末のサルコジ大統領訪日の際には、大統領が日本に対しロボットや資材、

汚染水処理などの面で多くの支援を提案したとし、とくに仏原子力企業のアレバ社が6月10日から高濃度の放射性物質を含む汚染水の処理を請け負っていることを紹介した。

最後に大使は「日仏関係は今後も強化していくべきで、両国が協力すれば世界的なリーダーシップがとれる」と述べ、日仏関係の強化の重要性を強調した。講演会は、質疑応答も含め、予定時間を大幅に超えて、盛況のうちに終えた。

（学生記者 荻原睦II 法学部3年）

## 母校の後輩たちを乗せた夢フライト! 中大高校・中大卒の副操縦士と客室乗務員 沖縄修学旅行『JAL905便』に同時乗務

去る5月30日、中大高校（後樂園キャンパス内）の3年生154名は沖縄本島・石垣島への修学旅行に

出発しました。その時搭乗した羽田発、那覇行き日本航空905便には中大高校・中大卒のOB・OGが、副操縦士と客室乗務員として二人同時に乗務するとい

で先輩・後輩の邂逅が実現しました。その経緯を中大高校3年生で構成する修学旅行委員が報告します。

中大高校では、卒業生をはじめ様々な分野で活躍する方々のお話を聴く進路学習講演会を行っています。昨年の11月、パイロットになる夢を実現させた池田先輩に高校に来ていただきお話を伺いました。生徒全員

の質問に丁寧に答えていた。だき、進路を考えるうえで大きな刺激となっていました。

一方で、今年の修学旅行は5月30日から沖縄に行くことが決まっています。往路はJAL905便に搭乗する予定でした。当然、池田先輩が日本航空の副操縦士であることは全員が知っていました。そのフライト

のコクピットに池田先輩が座るなんて全く想像すらしていませんでした。もっとも、905便が羽田を離陸する時、何人かの生徒が「この飛行機、池田先輩が操縦してたらすごいよね!」と、全くあり得ない前提でしゃべっていた人はいたようです。

やがて、操縦室から乗客への挨拶のアナウンスにより、池田先輩がこの飛行機のコクピットで実際に操



中大高3年の教室で

縦していること、しかもOGの和田先輩までもが、客室乗務員の一人として同じ便に乗務していることを知り、最初は何が起きたのか混乱しましたが、少し経つて事情が飲み込めると生徒の間から期せずして拍手が湧き起

りました。旅行終了後、二人からのメッセージとして、高校時代の友人や恩師はかけがえのないものであること、何事にも真剣に取り組むこと。また、就活では自分の信念や価値観をしっかりと

きました。二人の頼もしい先輩の働く姿を目の前にして、将来を見据えて高校や大学で学び、自分の希望や夢を抱いて歩んでいくことの大切さを身を以て教えていただくこととなりました。お二人の先輩に、3年生全員、心から感謝の気持ちをお伝えします。本当に信じられないくらい幸運な出来事にみんなが感銘を受けています。



機内で和田千奈さんと

お世話になったクルーの方々とともに私達はずっと忘れることはないでしょう。お二人の職場でもある日本航空に感謝してエールを送ります。

【修学旅行委員会委員長、欠塚玲・杉野美沙希】

【先輩たちのプロフィール】

○池田 惇（じゅん）さん  
 ……2001年、中大高校を卒業し中大法学部に進学。卒業後は日本航空にパイロット訓練生として入社。厳しい訓練生時代を経てB777型機のライセンスを取得し、昨年10月より国内線・国際線に乗務。高校時代はサッカー部の中心選手として活躍する。



池田副操縦士と那覇空港到着ロビーで

○和田 千奈（かずな）さん  
 ……2006年、中大高校を卒業し中大総合政策学部に進学。就活では苦勞しつつも難関を突破して日本航空に客室乗務員として入社。保安要員としての厳しい訓練を経て、現在国内線に乗務。